

まとめ

年会の感想

会長 岡村定矩（元東京大学・法政大学）

私は本会のことは設立当初から知ってはいましたが、年会に参加したのは今回が初めてです。この三日間はまさに「目から鱗が落ちた」感じがしました。

初日の視聴覚に障害のある人が宇宙・天文を楽しむテーマセッションは、手話通訳と自動音声翻訳が入り、まさに本会だからできたセッションと感心しました。発表の中に、「障がい者からも天文学者を」という話があったのを受けて、セファイドの周期-光度関係を発見した有名なヘンリエッタ・スワン・リービットの話を紹介しました（後に会員の小川誠治さんより、日本にも小川清彦さん（1882-1950）という先達がおられることが天教メールで紹介され、その後他に何人かの例の紹介が続きました）。

年会の発表を聞いて、会員の皆様の活動のベクトルの多様さに改めて驚きました。会長の立候補声明で「会員が推進する活動を支援するための仕組みを構築します」と述べましたが、そのためには会員の皆様が何を期待して入会されたのかこの多様な活動の動機の把握が必要と感じました。また、これだけ多様な活動の情報を知れば加入したいと思う人がまだまだいるのではないかと思いました。何らかの会に入会する大きな動機は、会費よりも得られるメリットが大きいことです。入会して何が良かったのか会員の体験を語って頂く「良かった探し」をして、それをなんらかの形でホームページなどでアピールすると、会員増につながるのではないかと思いました。

大学以外で私が関わった教育に関する活動といえば、ある教科書会社の中学理科教科書の編集に30年近く関わったことです。現在使われている平成28年本とその1代前の本では編集代表を務めました。この中で私は日本社会の科学リテラシーのレベルを上げるには、中学校理科の教科書を生徒だけでなく大人も読むことがとても有効だと気がつきました。中学理科にはいわゆる物理、化学、生物、地学の4分野すべてが含まれているからです（ただし、地学の天文分野は中学理科の内容だけでは十分ではありませんね）。教科書の奥付の「保護者の皆様へ」に、「保護者の皆様も是非お子さんと一緒に、この教科書で「科学する心」に触れてみませんか。皆様にも新しい発見があり、会話も弾み、お子さんの学ぶ意欲もきっと高まるでしょう。保護者の皆様と一緒に学んで教科書になって欲しいと思います。」という文章を寄稿しています。

グローバルという言葉が昨今大流行です。グローバルは「全地球的」という意味です。宇宙を知り、学び、楽しむことによって、地球という太陽系の一つの惑星にとどまらず、宇宙という視点で物事を考えるユニバーサル（宇宙的）なものの方が身につくはずで、国連は2015年に総会でSDGs（Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標）を採択しました。「母なる地球」が多くの国で共通した表現であることを確認するという宣言も含まれています。SDGsの目標の中には、グローバルだけでなく、宇宙の中の地球というユニバーサルな視点を特に必要とする目標も掲げられています。高梨直紘さんもメールで触れていましたが、会員としての皆さんの多様な活動をSDGsの中に位置づけて見ると新たな気づきがあるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、日本天文学会「インターネット版天文学辞典」を皆様の教育普及活動でも是非活用して頂けるとありがたいです。この辞典は今後末永く改訂・更新を続けてゆきます。皆様からの建設的なご意見をお待ちしています。